



六甲山から学ぶ

校長 森澤 克行

昨年度、本校の中谷勝彦教諭が6年生の児童と一緒に「砂防は希望」というテーマを掲げ、六甲山を教材化した学習を展開しました。この学習は、六甲山の土壌である花崗岩の風化の進行により今まで多くの土砂災害を起こしてきたことを端にして作られました。その中で、「砂防ダム役割を知ること」、「過去の災害を知ること（六甲山の地質について知る）」、「これから私たちがどんなことができるかを考えること」を3本の大きな柱として防災教育を進めていく構成になっています。

今から約1億年前の日本列島がまだ大陸の一部であったころ、その大陸の辺縁部では、火山活動が活発でした。六甲山はそれらの火山の地下のマグマがゆっくりと冷えて固まった花崗岩でできています。

地下でできたものが今現在、地表で見受けられるのはどうしてでしょうか。それは地震が起こるたびに隆起してきたためです。（1995年1月17日に起きた阪神淡路大震災においてもおよそ12cm高くなったといわれています。）度重なる地震により、六甲山は、1000m近くまでの高さまで成長しました。しかし、地表に出た花崗岩は、隆起の際にできたひびに雨水が染み込み、鉄分が酸化したり、水分が凍ってひびが大きくなったり、さらには深成岩のため、構成する鉱物の粒が大きく気温差による膨張・収縮率が異なっていたりして風化が進み、砂状になって、土砂災害を招くことにつながっていきます。

そこで昨年度の「砂防は希望」の学習のまとめとして、私たちにできる土砂災害を減らす手段の一つとして、植樹されたブナの世話をすること提案しています。

ブナは、本州中部では標高1000m以上で見られます。六甲山地では極楽茶屋の北斜面を中心にわずかにみられる神戸では珍しい植物です。ブナ林の土は、スギ林の土壌と比べても保水力が高いという実験結果があるように、ブナを植林することで「緑のダム」として機能してくれることが期待できます。

今年は昨年度の提案を受け、土砂災害の悲慘さ、恐ろしさを風化させることなく、また防災意識を高めるためにも、ブナの下草刈りや苗木植え、また苗づくりにチャレンジできればと思っています。そして、それらの活動を通して私たちの六甲山と共に暮らす人々への貢献ができればと考えています。

このように六甲山は、私たちにいろいろなことを教えてくれます。今年度も六甲山を通して、命の大切さや自然の雄大さ、そして美しさと厳しさ等たくさんのことを子供たちとともに学んでいきたいと考えております。保護者の皆様のご支援、ご協力をお願いします。

「砂防は希望」の学習の様子をまとめたパネルが5月より、記念碑台にある兵庫県立六甲山自然保護センターで「六甲山災害からの復旧の軌跡」特別展で展示される予定です。来校された際には、是非ご覧下さい。